



TITLE:

(随想)妻の病気に想う

AUTHOR(S):

篠田, 孝

CITATION:

篠田, 孝. (随想)妻の病気に想う. 泌尿器科紀要 1966, 12(12): 1337-1338

ISSUE DATE:

1966-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/113079>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 12 巻 第 12 号

昭和 41 年 12 月

随 想

妻 の 病 気 に 想 う

岐阜大学医学部助教授 篠 田 孝

去年の9月10日、それは丁度台風26号が本土に接近していた時で、私は第8回日本腎臓学会に出席のため、東京のDホテルに宿をとっていた。夜半近くなって、岐阜からの電話で、妻の病状が悪化したから至急帰れと、呼びもどされることになった。その夜は電車もなくなったので、明朝一番で帰ることにして電話を切った。丁度1週間前に腎結核で腎臓を摘出したが、2日前までは至極経過も順調でまづまづと安心して上京したのだが、昨日来強い頭痛と嘔吐、嘔気が続いているとのこと。その晩はいろいろと想像して、寝苦しい夜であった。

翌11日の午前11時には病院に着くことができた。妻は昨日から尿量が少なくなったと告げ、病状の悪化は私が置き去りにして上京したせいだと責める。早速カルテをみると、なるほど昨日の尿量は400cc、今日は昼までに、100ccと乏尿である。これは大変とNPN値を測定すると98mg/dlで、急性腎不全の直前であること間違いなし。各種利尿剤を投与したが全く反応なく、夕方からとうとう完全無尿になってしまった。1時間毎に行なう導尿も空しさを募らせるばかりで1滴も出ない。夜中近くなって妻は目がみえなくなると云い始めた。これはえらいことになったと、とにかく腹膜灌漑をやってみようと、苦しむ妻を云いきかせて、穿刺針をさす私の手は銃口の前の敗北者の手のように震えて力が入らない。朝までに約5000ccの灌漑を終ったが、NPN値は依然上昇し120mg/dlで、無尿は続いた。私はも早や生と死のギリギリの限界に立たされて、自分の微力さ加減を白ら白らとみせつけられてしまった。折しも台風26号は運命をあざ笑うかのように、病室の窓ガラスを容赦なく吹き鳴らした。

当病院には人工腎がない。患者を京大の方へ運ぶとしても、台風の真最中、それに妻の状態が3～4時間の道中に耐え得るかどうかも疑問である。自衛隊のヘリコプターを利用する話も医局の先生の間ですすめられたが、台風の状態をみないと飛べないとのこと。周囲の雰囲気から、妻も自分の病状の悪化に気付いているらしく、しきりに子供のこと、家のことについて讒言のようにいう。

とにかく長い長い嵐の夜が明けて、朝日が部屋に射す頃になったが、やはり妻は私の顔が見えないという。早速、眼科医の検査をお願いしたところ、眼底網膜全体に細動脈の強度の攣縮があるとのこと。その時私の頭に、腎の細動脈にも同様の事態が起っているのではなかろうかという考えが浮んだ。直ちに、薬をも掴む思いで、イミダリンとカリクレンの注射をした。ところが、天の助けとはこういうことをいうのであろうか、約45分後には私の顔がはっきりとみえるようになり、約3時間後に75ccの尿を排出した。泌尿器科医になって10年間、これ程貴重な尿をみたことがない。早速その尿を看護婦さんや医局の先生に小踊りしてみせて廻った。皆んな心から喜んでくれた。

あれから丁度1年過ぎた今は、妻は子供達から中年肥りといわれる程体重もふえ、至極元気に家庭の平和を守ってしてくれる。

今1つ憶い出すことは3年前、米国北カロライナ州のデュク大学にいた頃、3人の無尿患者が内科で事務員として働いていたことである。というと一寸奇妙に聞こえるかもしれないが、彼らの腕には Silastic-Teflon の Canula が付いていて、週2回定期的にスウェーデン・フリーザーの人工腎による透析が、いとも簡単に行なわれていたからである。患者の名前は忘れてしまったが、何れも半年乃至1年前から透析を続け、透析のない日は病院の仕事を手伝っているというのである。私も2～3度透析中の患者に話しかけたことがあるが、何時もにこにここと気持よく質問にも答えてくれたし、透析中でも普通に食事をし、新聞も読み、不安の色など微塵も見えないのは全く不思議に思われた。しかも驚いたことに、これらの透析の操作が全然医師の手を煩わさないで、たった1人のテクニシヤンの手で、スムーズに行なわれていたことである。

あれからもう4年になろうとしているが、まだ日本にはこのような人工腎センターが1つもないことは本当に情ない。私共の大学にはまだ人工腎すらない。2～3年前から機会ある度に各方面に話しかけているが、なかなか買って貰えない。癌に対する認識は最近頃に深まって来たが、尿毒症とか人工腎といっても、一般の人にはピンとこないのだろう。お互いに無尿の辛さ、苦しさを自分のこととして考えてもらいたいものである。病魔は思いがけない時に自分の身边に降りかかって来るものである。まだまだ私共の夢が報いられる日は遠いが、必ずその日の来ることを信じて微々たる努力でも絶えず続けて行かねばならぬ。

白い大きい花卉をつけた南部の花、マグノリヤの香り漂う、北カロライナ州立大学の美しいキャンパスの中央に、大きい日時計があった。その大理石の石畳に次のような文章が刻み込まれていたのが今も懐かしく憶い出される。

Today is yesterday's tomorrow, it is always morning somewhere in the world.